

〈書評〉

山本栄一著 『問いかける聖書と経済
—経済と経済学を聖書によって読み解く—』

(関西学院大学出版会, 2007年, 297頁)

Eiichi Yamamoto, *The Bible and Economy :
Economy and Economics Viewed from the Bible.*
Kwansei Gakuin University Press, 2007, pp.297.

田 中 敏 弘

この本はキリスト教主義大学での講義ノートである。それは関西学院大学経済学部の学生に対して行われた講義と、その続きとして予定された講義ノートをもとに著わされたものである。したがって通常の学術研究書にみられる文献考証上の脚注などはみられず、自由な書き下しの形がとられている。副題にあるように、「経済と経済学を聖書によって読み解く」ことを目的に、それは前編を聖書（キリスト教）と経済、後編をキリスト教と経済学をめぐる諸問題にあてられている。

前編の第1章と第2章では、「宗教とりわけキリスト教と経済の関係」と「キリスト教における聖書の位置」という題目のもとに、本論に必要な準備として、キリスト者の世界観、人間観、経済観に関するイントロダクトリー的な説明が与えられている。したがって、著者が言うように、こうした予備知識をとくに必要としない読者は、第3章から入ることもできよう。

したがって、前編の中核は、第 3 章「聖書における『経済と人間』」、および第 4 章「聖書が伝える『経済社会での生き方』」にあると言える。ここではまず、経済は今日、聖書からみると、何を意味しているのか、次いで、現代の経済社会においていかに生きるべきかについて、聖書（キリスト教）の指し示す考え方を明らかにしようとしている。

このようにして、キリスト教の世界観、人間観のなかで、経済はどう位置づけられるのかという、キリスト教経済観が、そしてそのような経済社会で、人はいかに生きるべきかについて、聖書は何を示そうとしているのかが問われることになる。

こうしたキリスト教と経済に関する理解を基礎にして、後編では「現代経済学を聖書によって見直す」第 5 章と、「新しい経済学へのささやかな一歩」という第 6 章とにおいて、著者は現代経済学の諸前提や枠組みがもつ問題点を、聖書に照らして明らかにしようとして試みている。そして最後に著者は、これと関連するさまざまな多岐にわたる問題に触れつつ、聖書からみた現代経済学を革新する方向について、ひとつの試みを提案しようとしている。巻末に付された「補遺」では、この本をまとめる過程で書かれた論文と「カルヴィニズムと経済学—B. ハウツワールトの場合」という短い紹介が再録されている。

以上がこの本を構成する骨組みの概略である。そこで以下では、キリスト教—著者はこれをいつも「聖書」という表現を用いている—と経済の問題と、キリスト教と経済学の問題とに焦点を絞って、その内容を紹介することにした。

聖書からみた経済と人間に関しては、経済を経済の問題として取り上げると同時に、経済を超える、人間にとって究極的なものとの関係で経済問題を捉え直し、経済問題を絶対的なものとするところから脱却する道を見出す鍵を手に入れることを可能にするというのが、著者の結論に他ならない。これが聖書のいう「人はパンだけで生きるものではない」との見方であることが明らかにされている（第 3 章）。

第 4 章では、見方を少し変えて、経済的価値は生活を支える不可欠な基盤だが、人間を支える他の諸価値のなかで相対的なものであり、けっして絶対価値をもつものではないという、経済的価値の相対性の自覚と、それに基づく行動

田中：山本栄一著『問いかける聖書と経済—経済と経済学を聖書によって読み解く—』

の重要性が指摘されている。また聖書の労働観、労働と閑暇の間の選択問題にも触れ、キリスト教における「安息日」のもつ、この選択を超えた意味など、幅広く論じられている。

その上で、モーセの十戒にさかのぼり、その解説が行われている。十戒の根幹をなすキリスト教経済倫理は、著者によれば、「正義」と「愛」と「喜ぶ」ことであり、「慈悲」、「正義」、「公正」、「衡平」、「勤勉」、「効率」を求めようとしない「自己中心的経済行為」に対する戒めを示すものとされている。

次いで、「スチュワードシップ」、一神から与えられたものを、神の創造の意向に従って「良く管理する」任務—のもつ現代的意味が問われている。現代社会での「正義」と「愛」の具体的な姿は何か。産業社会における「正義」と「愛」の問題、産業社会を構成する各構成員とその団体の間における「スチュワードシップ」とは何か。さらに家計を中心とした日常生活における問題に加えて、企業、家計、政府、労働組合、NPO (NGO) などの経済主体における「スチュワード」としてのあり方が問われている。

以上にみたキリスト教経済倫理にたつて、現代の経済学をみれば、どのような問題点が見えてくるのかが、次に問いかけられている。ここからは、経済学に関する初歩的な知識が一応前提されることになる。

まず第1は、現代経済学が前提する人間観、世界観が、①「合理的個人」の前提、②功利主義による経済行動の説明—効用と経済的厚生の問題、③経済法則における機械的決定論の3点について問い直されている。ここでは、「合理性」の限界および世界の有限性と資源維持の重要性および緊急性が強調されている。

さらに、著者は節をあらため、「市場メカニズムの光と陰」と題し、私有財産制と市場メカニズムを吟味し直している。その結論として、著者は市場の環境整備の一環として、個人的な視点を超えた社会的な視点から公共の福祉との関係で、私的所有における権利の枠組が作られねばならないとしている。この意味における市場の社会化に力点がおかれている。価格メカニズムのもつ資源配分における特性を指摘したのち、著者は聖書から知る価格メカニズムの特性と対比し、「ぶどう園の労働者」のたとえ話しから、人格関係の重要性を示して

いる。市場メカニズムのプラス面としての、権力からの一定の解放と同時に、人間関係を断ち切る、カネ中心の世界へという、そのマイナス面をあらためて示している。その上で著者は、市場のプラス面を発揮させつつ、そのもたらすマイナス面を弱める方策を絶えず検討し具体化する政府の役割を、「政府の失敗」にもふれつつ強調している。

次いで「経済規範と経済主体」の項目のもとで、企業、家計、政府、NPO (NGO) による「効率」と「公正」のバランスを、「愛」と「正義」のバランスとして、いかに検討し維持してゆくかが目指されねばならない点が具体的に取り上げられている。

以上から著者は、「誤解を恐れず」、「私」と「公」を結ぶ「新しい共同体」(pp.185~) への方向を指し示そうとしている。この方向をもたない場合は、市場経済は「人間社会としては連帯性を失い、社会経済の機能的側面のみが強調され、人間としての尊厳を失っていく」と警告している。聖書からみた「人格的關係」こそ、この共同体の生命だからである。ただ著者は慎重に、今必要なことは、新しい共同体をつくることでも、それを理想に置くことでもなく、「それをイメージし、現実が向う方向として、それに向って、絶えず舵取りをすること」だとのべるにとどめている。

このような聖書からみた現代経済学に対する批判的コメントを基礎にして、では経済学はキリスト教(聖書)の立場からみて、どのように変革されるべきかが、最終章で取り上げられている。これが「新しい経済学へのささやかな一歩」である。

著者はまず、宗教的背景をもった経済学のアプローチとして「包括的経済分析の試み」を提唱する。このためにまず、今日よくみられる新古典派的背景をもった経済分析を経済以外の人間行動のさまざまな領域にまで拡大しようとする、いわゆる「経済学帝国主義」が批判される。そして制度的・構造的分析や歴史分析の重要性が指摘され、人間行為は人間性という全体的な観点からみられねばならないとされている。

次いで、著者は、経済学のキリスト教的背景として、アダム・スミスとボールディングの立場を紹介し、加えて「フロー／ストックと短期／長期」問題に

田中：山本栄一著『問いかける聖書と経済—経済と経済学を聖書によって読み解く—』

ふれ、生活の質を把握する重要性、フローだけでなくストックのもつ重要性、自然資源への配慮などを強調している。著者が言おうとしているキリスト教的視点に支えられた包括的経済分析は、21世紀が直面する課題への解答のひとつなのである。

すでに述べてきたところから明らかと思われるが、この本の主張の根本は、聖書は絶えず全体的包括的見方に立ち返るべき「方向」と「構造」を指し示すものであり、これを具体的には「市場経済の公共化（社会化）」として求めていることにある。

著者はキリスト教経済・経済学の問題として、①聖書原理主義（ファンダメンタリズム）による経済の見方を拒けている。聖書が科学の教科書でないのと同じく、社会、政治、経済のあり方の教科書ではないからである。また、これに関連して、すでにこれもキリスト教界で十分議論されてきたように、著者は「キリスト教経済・経済学」と「キリスト教主義経済・経済学」の相違にもふれ、後者の立場を確認している。

最後の結論ともいえるべき「経済観（世界観）と人間観との総合的視点の提供」では、今日、経済学に「人間性」を復位させる必要性が痛感されているとき、人間社会の連帯への方向を指し示し続けることの重要性が重ねて強調されている。ここではH.R. ニーバーの『キリストと文化』に示された教会共同体が提示されている。このさい著者は、教会と文化の関係をめぐる諸類型のうち、アウグスティヌスにはじり、カルヴァンにより明確化された「文化の改革者キリスト」という類型を念頭においていると言える。

この本の著者、山本栄一氏は財政学を専攻し、なかでも租税論、租税政策に関連した研究者である。氏は公共財の理論と租税理論の結合による租税体系の研究といえる『租税政策の理論』（有斐閣、1975年）や、『都市の財政負担』（同上、1989年）の著者である。著者の経済学研究は、その方向や構造をきめるヴィジョンに支えられ、「効率」だけでなく、「公正」という視点からする経済観、社会観がその基礎におかれているといえる。著者は財政学という狭い領域における専門化に枠づけられることなく、広く経済学全般を視野に入れ、現代経済および現代経済学と、その歴史的展開に深い関心をもち続けてきた。ここ

から、人間と経済の関係という問題に絶えず向き合い、人間と経済、人間と経済学の緊張関係と相互補完関係の問題に長い間取り組んできたことが分かる。

今回の経済学部生を対象とした講義ノートに基づく「キリスト教と経済」を中心にすえたこの本は、この「人間と経済・経済学」の関係を、やや体系だった形で取り上げたものである。これは自ずと著者自身の信仰告白でもあり、自身の聖書理解、人間観、経済観、世界観を明るみに出し、その上にたって現代経済学のメリット、デメリットを明らかにし、その変革への一步を指し示そうとしたものといえる。

こうした背景から、この本にみられる最大の特徴のひとつは、人間と経済・経済学の関係をキリスト教倫理の観点から見るうえで、とくに「カルヴィニズム」による聖書理解をその基盤としている点にあると思われる。このように、キリスト教倫理とそれを支える聖書理解の基本をプロテスタントのなかでも、とりわけ「カルヴィニズム」というひとつの教派の神学とそれに基づく思想が強調され、かなり前面に押し出されている。しかしこのことは、メリットであると同時にデメリットにもなりうるように思われる。

なるほど、著者はカトリックも含めた「エキュメニカル」なキリスト教の動きに一応は触れているものの、ごく簡単なものにとどまり、キリスト教全体を基盤としたキリスト教社会倫理という基本的な視点が、ややもすると後退しがちであるのが気になるところである。

このように教派を余りにも前面に出すことは、とくに教派に関係なく、少なくともキリスト教倫理の基本的観点から、人間と経済・経済学をみようとするキリスト者から見れば、カルヴィニズムをとくに強調することじたいが、ある意味での閉鎖性を示す狭い視野と映るかもしれないからである。

さらにまた、とくに今日の経済学・経済思想との関連において、いわゆるヒューマニスティックな社会倫理的立場が、ますます新しい重要性を帯びて展開されつつあるとき、こうしたヒューマニズムの立場からの動きと、一定範囲において共に協力し合うことを可能にする視点が抜け落ちる危さが感じられないであろうか、総じてヒューマニスティックな立場にたつ NPO (NGO) などの協力関係が薄れるおそれもなくはないからである。これが評者の単なる危

田中：山本栄一著『問いかける聖書と経済—経済と経済学を聖書によって読み解く—』

惧の念にとどまるならば幸いである。

著者も指摘しているように、関西学院大学経済学部では、1979年以來チャペルで「経済と人間—経済学を学ぶ心—」という、学生に対するシリーズ形式の講話が始まったが、著者はこれにも深くかかわってきた。毎年その講話の要旨が編集され、パンフレットとして学生・教職員に配布され、1992年には、これらの蓄積のなかから編集されて、『いま経済学を学ぶ—経済と人間』（日本経済評論社）として出版されたのであった。

こうした講話シリーズで著者が語ったもの17編が、この本に「コラム」として収録されている。これらのコラムは、この本を通読するさい、ひと休みするのに効果的であるだけでなく、本論の肝心のところを短い言葉のなかに要約する働きを果している。たとえば、第6章末のコラム「経済を支えるもの」は、この本の主張点を手短かに分かりやすく語っている。

ただこの本には、「講義ノート」段階のものがそのまま残り、十分な整理がゆきとどいていない欠点もなくはない。また、論点が余りにも多岐にわたり、そのためやや説明不足を感じさせる箇所もみられるのが残念である。ことに、市場の原理主義的側面に対する批判として、経済学の向うべき方向を指し示そうとする重要な「新しい共同体」という概念は、誤解を招かないために、さらにいっそう慎重な説明が求められると感じる読者もいるのではなかろうか。

ここでひとつ希望をのべるとすれば、キリスト教独自の慣用語句などはもつと慎重に避けた方がいい。また、経済学関連でも、とくにキリスト教倫理に関連しても、分かり易い適切な参考文献を挙げ、それによって、よりすすんだ問題把握への入口とするのが望まれる。さらに、これほど多岐にわたるトピックが取り上げられている以上、適切な索引があればより有益であろう。

「経済・経済学と人間」という課題に取り組んできたひとりとして、評者はこの本の刊行を喜びをもって迎えると共に、著者に対して心からの敬意を表したい。この本は大学研究叢書の1冊として刊行されたものでもあり、関西学院大学経済学部におけるキリスト教主義教育と経済学教育に関連して、よりいっそう議論を深めるうえで、ひとつの優れたきっかけを提供するものであることは言うまでもない。すでに「キリスト教と経済」研究会発足の呼びかけが教員

経済学論究第 61 巻第 2 号

の間になされていると聞いている。是非学部内において、さらなる自由な議論の交わされることがまず望まれる。

もとより、この本は、関西学院大学という一キリスト教主義大学の経済学の教育・研究にたずさわる者にとってだけでなく、広く日本のキリスト教主義大学全体にとって有益であると共に、さらにそれを超えて、一般に「人間と経済・経済学」の関係について考えるうえで大きな示唆と刺戟を与えるものであり、一読を薦めたい。今日の社会において、ますますその重要性と緊急性を増しつつある環境問題、資源問題、格差問題、雇用問題、年金、医療、介護問題等々に対する取り組みの出発点が与えられるはずである。さまざまな批判なりコメントを通して、この本の主題がいつそう展開・深化されることが期待されるところである。